

医者も知らない平穩死



連載④

〈長尾和宏〉長尾ク
リニック院長。日本
尊厳死協会副理事
長。著書に「平穩
死」10の条件」など。

「食事ができず、親(あるいは夫や妻)がガリガリになつていくのを見ていたら、なくて、胃ろうをつけた」というような話をよく聞きます。

「主人公」はだれですか？

「欲しい」という気持ち

「自分だったら延命治療は絶対嫌だ。でも、親のこととなると話は別。胃ろうをつけてでも、人工呼吸器つけてでも、長生きして欲しい」というような話もよく聞きます。

延命治療を拒否し、自然に旅立ちたいと本人が言っていたのなら、それを尊重するのも、ご家族の役目ではないでしょうか？ 不治かつ末期の状態にある患者さ

私は思います。「主人公」はだれですか、と。精いっぱい生きた人生の最期を迎えようとしているの

私に、もはやその意思を主張できない状況なら……。私にも家族がいます。だから、「大切な人に少しでも長生きして欲しい」という気持ち



でも、一世一代の、晴れ舞台、を迎える患者さんには、その方が心から望む演出が最も望ましいと思うのです。「私が悲しい」「私

がづらい」とい少し横に置いて「本人がどう」を考えませんか80代の末期がながポツリとてあります。「私は、痛みや、く、自宅で家族逝ければ幸せな息子たちが(頑い)と言う。息めに、ギリギリ剤治療も延命治療あげようと思うわね」

つらい話やなました。(写真は)